寄稿

なぜいまロバート・オウエンなのか

篠田　徹
（早稲田大学社会科学総合学術院教授）

天の助け

原稿依頼というのは時に天の助けである。考えていることを前に進めたい時に、寄稿テーマという形でその絶好の機会を与えてくれる。最近有難くもそういうことが多い。今回もそうだ。例えば本誌編集部から頂いた課題は次の通りである。

「海外の古典をとりあげ、現在および次世代の労働組合リーダーたちにとってどのような重要な示唆が含まれているのかを明らかにし、忘れがちな労働運動の理念をあらためて再確認することを目的とする。とりあげる海外の古典は、オウエン『オウエン自叙伝』、ウェッブ『産業民主制論』、シュトゥルムタール『ヨーロッパ労働運動の悲劇』である。これらはそれぞれ、約150年前、約100年前、約50年前の著作であり、これらをつなぎあわせると、労働組合の盛衰の動きがみえてくる。それぞれの時代に指摘された問題点は、現代において解決されているのか、解決されていないならば現代の労働運動や労使関係に何が必要であるのかを明らかにすることとする。」

この中で筆者に与えられた課題図書がロバアト・オウエン『オウエン自叙伝』（原著1857年）（五島茂訳、岩波文庫、1961年）である。

オウエンとは誰なのか

オウエンとはいかなる人物か。彼には自伝の他に内外で沢山の伝記、評伝、研究書がある。その中で宮瀬睦夫『ロバート・オウエン―人と思想―』（誠信書房、1962）には、「オウエンの業績」という頁があり、そこではこう記されている。

「ロバート・オウエン（1771～1858）はイギリスにおける偉大な社会改革者であり、協同組合の先駆者、すぐれた実業家、工場改革者、労働組合の指導者であり、合理的宗教家であり、教育の先駆者であった。」

これを土方直史の『ロバート・オウエン』（研究社、2003）によって補足しよう。社会改革者であるオウエンだが、1848年に『共産党宣言』を著したマルクス、エンゲルスは、自分たちを「科学的社会主義者」と称する一方、それまでに社会主義者であるオウエンにサン・シモン、フーリエを加えて「ユートピア社会主義者」と呼んだ。オウエンはその後、労働党が社会主義と労働運動を繋ぎ、穏健かつ漸進主義的な改革路線で今日まで異彩を放つイギリス社会主義の父とも呼ばれる。この穏健的かつ漸進的な社会主義の大事な構成要素が協同組合運動であり、この点でもオウエンは父と呼ばれる。

だが彼が最初に名声を得たのは、イギリス産業革命の時代にスコットランドの大紡績工場主として、そこで働く児童を含む労働者たちの労働・生活条件の改善に尽力する経営で成功を収めた博愛主義的工場経営者としてであり、それを社会改革として敷延したのが彼の生涯でもあった。工場立法、児童・成人教育、工場厚生福利施設などを世界で初めて整備した点からは、その後の福祉国家やモラル・キャピタリズ

ム、そして日本的経営やアメリカのウェルフェア・キャピタリズムなど人間主義的な経営モデルを遠望できる。またその公明正大な経営手法は彼を「コーポレート・ガヴァナンス」の先駆者とも呼ばせる。

さらに彼は人間の可能性を閉ざす元凶として宗教を否定したが、彼が訴えた新しい社会観が広く受け入れられれば、すべての人々を最高の幸福で永遠に祝福する社会が間もなくやってくるとある種の「千年王国」を唱えた点で、宗教家であった。一方ニュー・ラナークの実験工場村やアメリカでの理想主義的なコミュニティづくりに邁進した点は、人間は家族や隣人と繋がり支え合って初めて人間たりうるというコミュニタリアニズムの考えの祖ともみなされる。これらのオウエンの偉業の根底に、人間の性格は環境が形成するという性格形成論があり、その考えに基づく彼の全人教育的な壮大な教育構想とその実践があった。

『オウエン自叙伝』が語るもの

実は『オウエン自叙伝』では、主にこの多彩なオウエンの前半生しか物語られていない。また訳語や文体が現代的ではないため決して読みやすいとは言えない。さらに英語の自叙伝はそんなものなのかもしれないと思ってはみても、卓抜した自己を強調する文章の山はやはり鼻に付くこともある。けれどもそれはその時代彼がいかに特別であったかを思い知ることでもある。

その意味でこの本は、否定的に描かれる部分を含めて、オウエンを取り巻く人々に注目して読むと、そのまま産業革命が起こった頃のイギリスがどんな社会で、人々はどんな暮しをしていたかが活写された良質な社会史であることに気づく。例えば彼が世界初の幼稚園をつくった当時の社会で、大半の子供は寝食以外の時間働くのは当たり前で、子供は親を含めて大人の体罰でしつけられると考えられていた。それと同時に独学で育ったオウエンの奇抜な考えが、当時の欧州の王侯貴族を含めいわば雲の上の人々の間にやすやすと受け入れられる様子は、その後発展する学校社会というものが、いかに人々の頭と心を閉ざすものであったかに思い至る。

こうしたオウエンの多面性が発揮される過程を見ていると、今日様々に分岐したあるべき社会に関する議論は、やはりどこかでそれらが由来するところにもどって考える必要があると思うと同時に、それらの議論は、最初は身近で小さくとも、また例えどんな結果になろうとも、とにかくやってみるという個々の実践の積み重ねを伴って初めて力になるというのがわかる。それに気づくと、例えば労働運動のことを考えるなら、時には時代がつくる思考のしがらみから自由になることが大事だと感じる。

なぜオウエンがうれしいのか

ではなぜ、このオウエンの話をすることが天の助けなのか。実は筆者は一昨年、全労済協会2011年度公募研究「絆の広がる社会づくり」で、「協同社会運動の主体形成を促す史的視野の研究：新たな協同社会運動史教育を目指して」と題して調査研究を行う機会を与えられた。働く人々に、これまでも又これからも皆で繋がり支え合って共に生きてゆく社会の主人公である事を、思い起させることができる運動史教育のありかたを考えること、それが研究の目的である。そこで日本の労働運動のみならず他の社会運動や他国のそれらにも目を配りながら、試行錯誤を重ねつつその歴史の伝え方を考えた。

その試行の機会の一つを、世界で空前絶後の質量を誇る『大阪社会労働運動史』の編纂刊行を続ける大阪社会運動協会が、大阪社会労働運動史講座という形で与えてくれた。一応講師は小生だったが、最後に提出頂いた研究論文を含め本当の先生は、多様な各自の仕事や生活の中でそれぞれに協同社会の実現をめざした経験を伝えてくれた受講生だった。そういう一人一人の運動経験が結び合って社会運動や労働運動は成立するということを、「小さな物語が繋がり支え合う大きな世界の労働運動」と題して、日米の運動史の中で長々と綴った。このもう一つの貴重な試行の機会を与えてくれたのが、同じく大阪で長く労働調査運動を実践してきた国際経済労働研究所であり、その機関誌『Int'lecowk』である。二つが大阪にあることは

偶然ではない。大阪は日本の近代資本主義が形成した最大の生活空間であり、そこに生起する様々な問題を多様な運動が縦横無尽に手を携えて解決してきた日本の協同社会運動のメッカである。

「協同社会」というと日本では協同組合運動用語のように思われるかもしれないが、筆者としては、英語圏の労働運動や協同組合運動が19世紀以来一緒に目指した、そして日本でも呼称は違ってもそれに近い考え方を少なからぬ人々が持ち続け、いずれも最近再び注目されるようになってきた”Cooperative Commonwealth”の意味で使っている。労働運動や協同組合運動も含む運動間交叉連合（Cross-movement Coalition）あるいは社会的自治（Associationalism）が重要な役割を果たすこの運動伝統は、近年例えばイギリスでは保守の「Big Society」や労働の「Blue Labour」といった構想の中で表現されている。また今『生活経済政策』で連載している「組合時評」で触れたごとく、アメリカではAFL-CIOの人権、学生、環境、女性団体との融合という形をとっている。さらに日本ではこの間、全国の労働福祉協議会や連合地域協議会が、働く人々の様々な生活ニーズに対応するワンストップサービスやライフサポート事業、さらには雇用可能性が低い生活困難者のパーソナル・サービス事業に関わる一方、先の参院選で山形では労農＋環境連帯が垣間見られた。これらの動きから、成立した生活困窮者自立支援法や今後広がる地域包括ケアシステムの展開の中で、生活支援者の重要な担い手として労組、農協、生協が協働して関わる可能性もある。

ちなみに筆者は四半世紀前に『世紀末の労働運動』という大げさなタイトルの本を出した時、その末尾でこういうことを書いていた。「今日の組合運動の閉塞状況は、運動の主体における想像力の欠如に大きく起因しているともいえる。組合の本義に忠実であろうとする気持ちが、ともすると組合についての既成概念への囚われとなり、表面的には拡大する活動領域への事後的な対処に追われる反面、内面的には「ここまですべきなのか」という気持ちにさいなまれる。しかし組合運動のあるべき姿を過去にさかのぼるならば、その肥沃な思想的土壌にこそ思いを巡らすべきであろう。そもそも組合とは、近代の渦中において、社会のあるべき姿を模索する数々の思想的営為の所産の一つとして、この世に生を受けたものである。だとするならば、人と人との豊かな関係を創造することこそ、組合が追求すべき本質的な課題であろう。職場において、地域において、組合員が他者との有機的な関係のなかで生きることができるよう援助することが求められる。そのためにも、組合はこれまで以上に外部との多元的な関係の構築を迫られているといえる。」

ブレなかったことをひけらかしている訳ではない。恥ずかしながら、最近までこんなことを綴ったのをすっかり忘れていたが、上記のことを書いたり見たりするうち、その親しみを感じる所以を考えて試しに旧著の頁をめくり、この下りを再発見した次第である。そういう筆者を知ってか知らずか、本誌編集部は労働運動が労働組合運動とその支持政党のそれに特化していく半世紀前ではなく、また労働運動が労使関係制度に埋め込まれていく一世紀前ではなく、労働運動が協同社会運動であった一と半世紀前にそれを推進したロバート・オウエンの自叙伝を勧めたのである。うれしいではないか。

オウエンの労働運動と日本の労働運動

ここでオウエンが推進した協同社会運動としての労働運動と日本の経験との繋がりについて考えてみたい。

オウエンがニュー・ラナーク工場での博愛主義的経営に成功し、工場改革や性格形成学院などの教育改革や協同的コミュニティの建設に乗り出す頃から、イギリス各地で労働者の間に協同組合が作られるようになり、その指導者たちの中にオウエナイトと呼ばれるオウエンの社会改革構想に共鳴する人々が多く含まれるようになる。この場合の協同組合は生産協力と公平分配を主とする労働者協同組合で、オウエンが唱えた貨幣交換に替わる労働交換の考え方に基づく労働券（現代の地域通貨や時間券の先駆）の発行、自家ブランドの販売（現代のコー

プ商品)、学習機会やレクリエーション活動を盛り込んだバザールと呼ばれる協同知識普及の文化活動を展開した。

この運動は、オウエンが理想のコミュニテュイづくりで渡米した1820年代後半に連合組織を結成し、その後代表者会議で、「みんなは一人のために、一人はみんなのために」という労組、協組でお馴染のスローガンを採択するとともに、先の労働券制度を発展させた労働公正交換所を設立する。そしてこの頃から彼らはオウエンが目指した労働者救済から労働者自立のための労働運動を展開するようになる。1832年の議会改革で普通選挙権導入が拒否されると、労働者たちは労働世界の主人公たらんと結集する。農業労働者組合の弾圧を契機に、当時まだ未分化だった全国の労働組合、協同組合、労働者政治結社が瞬く間に結集し、協力組織を含めると百万人というイギリス最初の労働運動全国組織である全国労働組合大連合ができる。その中で建築工を中心に手工業職人たちはストライキや自営の職業活動を進め経済的な独立を図ろうとし、その勢いは農村にまで広がった。この大連合は短期間で消滅するが、すぐにより整備された形でオウエナイト率いる万国全階級協会に発展した。

万国全階級協会はイギリス伝統の職人、宗教、地域などの生活文化に根差した下からの結社文化を、組織内に民主的に吸収すべく様々な工夫をこらした。会員候補制、地方支部内のクラスと呼ばれる班組織とその民主的運営、会費制、社会宣教師という巡回有給オルグ、オウエナイトの啓蒙・宣伝活動を兼ねた文化情報の組織的提供とそのための教育、娯楽、実利を結び合わせたソーシャル・フェスティバルなどである。さらにこの協会は、そうした活動を常時行うための会館建設やそこでの独自の冠婚葬祭行事や労働讃歌を含む会合儀式の導入などで、会員の積極的な組織関与を高めると同時に、当時の支配的な文化に対抗する新たな価値観に基づく労働文化、すなわちソーシャルな文化の可能性をめざした。

このオウエナイトたちの労働運動づくりを学びながら、筆者は1950年代の日本のそれを思い出した。いうまでもなく1950年に労組の全国統一組織として総評ができた訳だが、50年代に形成されるその組織運動スタイルはまた、今日の連合に至る日本のナショナルセンターの雛型ともなった。だがこの時期同時に協同組合運動も一部は労働運動と連携しながら発展していた。47年農協法、48年生協法、49年中小企業等協同組合法がそれぞれ成立し、いずれにも「共済事業」が挿入された。53年には労働金庫法も成立する。51年全国労働金庫協会、日本生活協同組合連合会、54年全国農業協同組合中央会設立。54年労働者共済生協が大阪で設立、火災共済事業を開始。57年全国労働者共済生活協同組合連合会設立。49年総同盟、産別会議、全労連、各産別、日本協同組合同盟などの団体が設立した労務者用物資対策中央連絡協議会は50年労働組合福祉対策中央協議会、57年労働福祉中央協議会、64年今の中央労福協に改称する一方、各都道府県地方労福協は、52年大阪を皮切りに順次結成される。この中の多くが大阪が発祥なのが目立つ。そして労働文化の運動組織として55年に国民文化会議ができる。

こうした労働運動と協同組合運動を結び、そこに働く者の新しい協働文化を創造しようとする動きの中で、戦前からそれに取り組み、労働運動、農民運動、協同組合運動、社会的キリスト教運動の父と呼ばれる日本のオウエン、賀川豊彦の存在は大きかった。そして2009年、賀川豊彦献身百年を記念してこれらの組織は連携して各種の記念事業を催した。それは翌年の国際協同組合年事業に繋がり、それまで疎遠の感もあった労働運動、協同組合運動の関係も再び近づきつつある。

これから日本は以前に増して、繋がり支え合って生きねばならない状況がすべての人々の生活の隅々に出てくる。近年様々な生活空間で不可欠な存在となっているNPOと協力しながら、労働運動と協同組合運動がどこまで連帯社会の再建に貢献できるか。いま日本のオウエナイトの力が試される。